

第 6 回日本臨床中医薬学会

プログラム・抄録集

2006 年 11 月 25 日(土)

慶應義塾大学医学部新教育研究棟講堂

2) 腸からみた漢方薬の働き

慶応義塾大学医学部漢方医学講座
渡辺 賢治

漢方薬は一部の外用を除いて内服するものがほとんどである。漢方薬が口に入った後、食道、胃を通過したのち、腸に達して薬効を発揮する。腸には 100 兆個ともいわれる腸内細菌が存在し、生体と共生しているが、漢方薬の成分の中には腸内細菌によって活性型に代謝され、吸収されるものがあることはよく知られている。一方、漢方薬の中には吸収されとは思えない成分も多々含まれている。このような成分がどのように腸管で働くのかについてはまだ明らかになっていない。われわれは、漢方薬の作用において、腸内細菌の存在がどのような意味があるのか、という疑問を持ち、解明を試みている。その結果、漢方薬の薬効の一部は腸内細菌が存在しないと働かないことが分かった。腸内細菌が漢方薬の成分を代謝する、ということはすなわちそれにより腸内細菌の組成が変化することも予想されるが、漢方薬の服用により、確かに腸内細菌が変化する。しかもその変化は漢方薬毎に特徴的に変化することも分かった。腸管遺伝子発現と漢方薬、腸内細菌の相互関係についても発表したい。